
サイクリング・サバイバル

秋島キサト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイクリング・サバイバル

【Zコード】

Z0672D

【作者名】

秋島キサト

【あらすじ】

光のないトンネルの中、追いかけてくる少女の声。彼女は僕に、何のメリットもないゲームを持ちかけてくる……。

なんで。

どうしてだ？

「振り向いては駄目よ。その瞬間、あなたの負けが決まるんだから」後ろから涼しげな少女の声が追いかけてくる。僕の体中の汗腺と、いう汗腺から、さらに汗が噴き出してきた。さっきより近づいてきている？

「コートの中に着込んだ学ランは、既にぐっしょりと濡れていた。自分の身体から出た水分のせいで全身が重い。コートを脱ぎ捨ててしまいだかつた。熱いんだ。冷たいのは上気した頬を切る風くらいなもので、皮一枚剥げばそこだつて熱い。何もかも脱ぎ捨てて身軽になつたら、もつと速くペダルを踏めるのに。でも今の僕にそんなことは許されるはずもない。自転車を止めたならそこでアウト。僕は彼女に追い越されてしまう。追い越されたらどうなるのかつて？それは知らない。だけど、どうにかなるに違ひないんだ。

乾いた眼球で前方を睨む。出口はまだ見えない。

事の発端は高校からの帰り道だつた。

僕の学校は家から遠くもなく近くもない位置にあり、電車で通うほどでもないが自転車では少し骨が折れる、といった感じだつた。入学当初から部活に入る気のなかつた僕は、少しば体力をつけておいた方がいいだろつということで自転車通学を選んだのだ。毎日片道一時間弱。家と学校との間にある山が大きな壁となつて、遠回りをしなければならなかつた。お陰で人並みの体力は保たれた。

さて、今日は高校に入つてから初めて迎えた冬のある一日である。

期末テストも終わり冬休みはもうすぐそこ、生徒達は開放的な気分で授業も上の空、教師達も苦笑いでそれを見逃す、全体的に浮ついた校舎。僕ももちろんその浮ついた奴の一人で、授業が終わり次第学校を出てぱーっと遊びたいところだったのだが、この日はそうもいかなかつた。環境委員の仕事で放課後残されたのである。僕は部活にこそ入つていなが委員会には入つていた（というより生徒全員強制的に何らかの委員会に入らなければならなかつた）。大掃除に備えて各教室の掃除用具を点検しろ、壊れたものや数の足りないものがあれば報告しろ、だと。それを何人でやつたと思う？なんとたつたの僕一人だ。他の奴らは部活で忙しいそうな。暇人は僕だけだつたというわけだ。それにしてもあんまりじやないか。

全ての教室を見回つた頃、時刻は既に六時を過ぎていた。夏ならばまだ外をふらふらできる明るさであつたろうが、何せ今は冬、既に男女の見分けもつかないほどの暗さである。普段授業が終わるのは三時半過ぎ、僕はその後即座に帰るから、こんなに暗くなるまで残つたことがなかつた。暗いわ寒いわ心細いわで、必死になつて自転車を漕いだ。一刻も早く家に辿り着きたいと思つていた。

そして思い出してしまつたのだ。このトンネルのことを。

「ねえ、振り向かないで。止まらないで。そのまま聞いてね。わたしとゲームしましょ」

背後からそんな柔らかい声が聞こえてきたのは、多分入り口から十メートルくらいしか走つていないときだつた。

相手が声優でもない限り、同じ年頃の女の子と思われた。可愛らしい、純白のワンピースが似合いそうな声で、もし容姿もこの声通りなら是非お付き合い願いたい、男なら誰でもそんなことを考えてしまうような声だ。しかし僕はときめくよりも先に眉をひそめた。こんな時間、こんな場所に女の子？ だってここ、今はもう使用が禁止されている、明かりも何もない洞穴みたいなトンネルだぞ。

では何故僕はそんなところを走っているのだと問われれば、近道だからとしか答えようがない。普段迂回している山の中を通り抜けるんだ、近いに決まっている。もちろん入ったのは初めてだつたけれど、案外簡単に侵入できたものだから驚いた。まあ使用禁止といつても、入り口に太いロープが高めに張られているだけだつたし。中は当然のように真っ暗で、自転車のライトだけを頼りに道の端を走つた。

「ゲーム？」

僕は走りながら思わず聞き返す。女の子の声は調子を変えず、僕の後を追いかけて答えた。

「そう。このトンネルを抜けるまでにわたしがあなたに追いついたらあなたの負け、逃げ切れば勝ち。簡単でしょ？」

「確かに簡単だけどそんなことをして僕に何のメリットがあるんだよ」

僕はその時、無意味とも知らずに至極常識的なことを言つてしまつた。

「メリット？」

後ろからクスクス笑い声が聞こえる。

「そんなものないわ。あるとしたらわたしにだけ。だけどあなたはもうこの勝負、降りられないの」

「意味が分からない。僕に選択権はないのか？」

「残念ながら。だつてほら」

声は付かず離れずぴつたりと僕の後を付いてくる。

「速度が上がつてるよ？」

その時僕は初めて、シャツに汗が滲んでいることに気づいたのだ。ペダルを踏む足に力が入る。乗つたわけではない、断じてこのゲームに乗つたわけではないのだけれど 追いつかれてはいけない、決して追いつかれてはいけない、無意識のうちにそう感じていた。

「負けたらどうなる？」

喉の震えを出来るだけ抑えると、妙に高い声になつた。ハンドル

を握る掌がぬめる。

「さあ。負けてみたら？」

声は大変愉快そうにふざけたことを言つた。僕は歯を食いしばり、一筋のライトの光が照らすトンネルの奥へ奥へと走つていいく。ライトはジージー音を立て、タイヤの回転速度に比例して明るくなる。もしもここでこのライトが切れたなら終わりだな。そんなことを考えたとき、ある不可解な事実に気が付いた。

彼女の自転車のライトは？

緩めることなくペダルを漕ぎ続けながら、僕は横目で道上を確認した。間違いない。後ろから来る光はない。先を照らすのは僕のライトだけだ。彼女はライトも点けずに僕の後を追つてきているのだろつか？

否。

そもそも彼女は、自転車を漕いでいるのだろうか？

耳を澄ますと、頬を汗が伝つて後ろへ流れしていく。聞こえてくるのは僕のタイヤがライトを擦る油蝉の鳴き声みたいな音と、それが舗装された道路を走る音。一台分。どう聞いても自転車一台分なのだ。

そう考えたとき、背筋が凍り付いた。
なんで。

どうしてだ？

「振り向いては駄目よ。その瞬間、あなたの負けが決まるんだから僕の心を読んだかのように、彼女は涼しげな声でそう言った。

走らなきや走らなきや走らなきや 出なきや後ろから包丁で刺される、そんな思考が僕の脚の筋肉を動かしている。

いや、刺されるならまだましかもしれない。分からぬのだ。僕は今、追いつかれたらどうなるのか分からぬのだ。これほどおぞましいことはない。

実のこところこんなに死ぬ氣でペダルを踏むのは初めてで、大腿筋

が猛烈に痛かつた。これ以上スピードを出したらまずい、筋繊維がぶち切れる、そう感じる一方で、ここで止まつたらまずい、あの声に追いつかれる、そんな脅迫めいたものが頭を支配していた。自分の呼吸がトンネル中に響くほど、心臓が活発に伸縮している。

彼女はクスクスと笑いだした。すぐ後ろ、もう一メートルに迫るうか。余程楽しいと見える。息切れ一つせず、彼女はクスクスクスクスと、僕の後ろに影のようにくつづいて笑っていた。

瞬きする暇もない。乾き切った目に向かってくる風邪は痛かつた。転んだりしたら終わりだ。きっと彼女は容赦なく抜かしてしまう。

と、その時。

見開かれた目に、ぼんやりと穴の輪郭が映った。
かまぼこみたいな半円形の輪郭。入ってきたところと同じ形。
出口だ！間違いない、外にあるわずかな街灯が照らしているんだ。

僕は安堵に涙が出そうになる。限界を超えた脚にさらに限界を強い、風のようにそこへ向かって自転車を漕いだ。あそこさえ出れば明かりもある、あそこさえ出れば、この得体の知れない少女から解放されるんだ。

しかし彼女の笑い声はやまない。

「ふふ……あはははは！」

不気味な咲笑は僕の呼吸音を覆つてトンネル内に響き渡った。
何がおかしい。そら、出口までもう少しだ。あと十五メートル、

十四、十三、一二、十一……

そこまで来て、僕の頬は再び凍り付く。

ロープだ。入り口と同じ、太いロープが高めに張つてある。脚にためらいが生じる。入ったとき、僕は一旦自転車を降りてロープの下をぐぐつてきた。それでもしないと通れないのだ。ロープはちょうど今の状態での腹の位置にあり、このスピードのまま飛び越えることもぐぐり抜けることも出来ない。

どうする。

出口まであと七メートル。

どうする。

あれほど恋しかった街灯が、もう田前まで迫ってきていた。どうする。

どうする、

笑い声が後ろから追い討ちをかける。

どうする！

出口まであと二メートル。

その時、

「追・い・つ・い・た」

棒切れのような細い指が、恐ろしい力で僕の肩に食い込んだ。

「あ、」

身体が後ろに引き倒され、足がペダルを離れ空を蹴る。

ひっくり返る視界の中、僕は確かに見たのだ。人の形をした何かが、ちょうど馬跳びのように、僕の真上を飛び越えるのを。

目の前が真っ暗になって、背中を強く地面に打ち付ける。僕が進むはずだった方向から、至極可愛らしい、純白のワンピースが似合いそうな声がした。

「次は、あなたの番」

そうして油蝉の鳴くような音とゴムがアスファルトの上を走る音は遠ざかっていった。

淀んだ暗闇の中に、一筋の光が差す。

僕は潜めていた身を伸ばし、数日ぶりのお客さんを見た。ロープの下をくぐってきたのは、十五、六歳の少年だ。学校帰りだろうか、学ランを着ている。少し怯えた様子で、そしてそれを抑え込むように眉を跳ね上げ、再び自転車にまたがって奥へと走り出す。

さあ、おもてなしをしなくては。理不尽なサバイバルゲームの始まりだ。

彼が十メートルほど走ったところで、僕も後ろから走り出す。そして無防備な背中に言つてやるのだ。至極柔らかなこの声で。

「なあ、振り向くな。止まるなよ。そのまま聞いてくれ。僕とゲームしようぜ」

(後書き)

いつも自分の文章はすっかりしきてこいる気がします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0672d/>

サイクリング・サバイバル

2010年10月8日14時19分発行